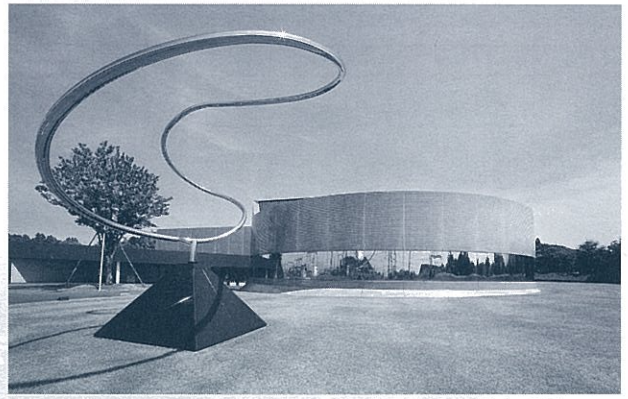




資生堂企業資料館



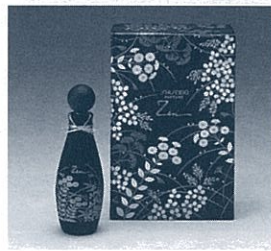
資生堂アートハウス

谷口吉生・高宮真介の設計
1979年度「日本建築学会賞」受賞

識全体に通じることではないでしょう。日本人には、見えないものを心で感じる美意識や感性を本来持っていて、視覚だけでなく、五感のすべてで対象を感じる事ができるのです。

資生堂のパッケージを例にあげますと、あるデザイナーは二つの要素の統一が重要であると言うのです。ひとつは「余白の美」。日本画の余白や間合いなど、日本人は空間の捉え方が繊細です。もうひとつは手になじむ、心地いいなどの「用の美」です。

この二つの要素を統一したのが「香水 禅」であると言われています。



香水 禅

「ものごとはすべてリッチでなければならぬ」

資生堂の初代社長福原信三の言葉です。ここでいう「リッチ」とは、物質的な意味でもなく、ましてや価格のことでもありません。そ

れも一部には含まれるかもしれないが、それ以上に心の豊かさ、心の贅沢といった、もつと広がりのある本質的な意味で言っています。究極のエレガンスという人もいます。私は「本物のことだ」、「本物は芸術と同義語」と答えています。美しいものに触れるひとときはこのうえなくリッチなものです。「本物」はリッチに溢れています。資生堂が本物にこだわる理由はここにあります。

美術館、博物館の役割について教えてください。

今を生きる芸術家の成果物を保存、展示すること、先人たちが創造してきた歴史、文化を学べる知的・感性的資産の宝庫であり続けるという役割を担っています。先人たちの営みは、書物によっても学ぶことができます。しかし美術館や博物館では、本物が語り掛ける迫力があり、直接それに触れることができます。いかにしたらよりよく生きることができるか、さらによりよい社会を築いていくに

はどうしたらよいのか。それらを考えるためのきっかけと情報を提供するのが美術館、博物館であると考えています。

アンケートに「この一枚の絵で元気になりました」「生きる勇気が湧きました」という人がいます。私はアートの力でこういう人をひとりでも多くしたいと思っています。

大木敏行さんプロフィール

1980年に資生堂入社。秋田・神戸支店を経て、1990年より本社医薬品事業部、ヘルスケア事業部、エテュセにて勤務。管理職では事業管理、経営管理の業務に従事する。

2013年に資生堂アートハウス・企業資料館の館長として赴任。昨年はじめに定年を迎え現職に至る。第一回「かけがわ茶エンナーレ」の実行委員長も務める。

